

鈴木 克明 SUZUKI, Katsuaki

81 年教育学科卒 (25 期 ID81)

DAY 賞の受賞、身に余る光栄にとっても喜んでいきます。推薦してくださった方がどこかにいらっしゃるということですね、どうもありがとうございます。同窓会賞を頂戴するのはこれが2度目ですが、1回目は学位取得後も交流が続いていた留学先の教授たちが推薦しての受賞という「経路」が明確でした。しかし、この度は誰にお礼を申し上げてよいやら、困惑しています。受賞は不意打ちでしたが、コロナ禍でオンライン教育に注目が集まったタイミングが功を奏したのかもしれない、と思うと、この病魔の犠牲になられた方々、後遺症に苦しんでいる方々、そしてエッセンシャルワーカーの方々に向ける顔がありません。ただただ、自由に外出・交流ができ、海外渡航ができる日が一日も早く来るように祈るばかりです。

日本の大学は緩すぎるから、留学しなさい。学校の教師をしていた父にそう諭されて、しかし留学ができなくて、日本にあるが日本の大学らしくない大学の受験に成功し、ICU にお世話になりました。教職課程を履修する中で出会った Graded Direct Method に魅せられ中学校の英語教師を目指し、周囲に多かった英語が堪能な人たちに刺激を受け、これからでも留学したいという夢をかなえてくれたロータリー財団の奨学金のおかげで、米国に学びました。留学先の希望はロータリー奨学生に不人気なフロリダ州という幸運もあって、最も学びたかった故ロバート・ガニェが教鞭をとっていたプログラムに行けることになりました。つい長居をしてしまい、帰国後は中学校教諭にならずに大学で教育工学を教え、研究する人になりました。

あれから 30 年が経ち、社会が大きく変わる中で、なかなか変わらない大学教育。ICU での緩くない教育を体験し、海外でも学び、そのあとで、新しい学部や大学、新しい専攻の立ち上げを経験し、またいくつもの国際協力プロジェクトで研修講師養成にもかかわってきました。今でも変わらない「緩すぎる日本の教育・研修を何とかしなければ」という思いの原点は、ICU にありました。「教え方」には教育工学という学問的な裏づけがあるのだから、それを一人でも多くの人に知ってもらいたい。教育の実践を少しでもよくするためにその知見を活用してもらいたい。そんな思いを少しでも具体的な形に残すように、今後も ICU の同窓生であることを誇りに、精進します。

あまり頻繁ではありませんが、「私も ICU 卒」なんです、というたまに訪れる出会いにはいつもワクワクさせられます。そういう出会いを今後も数多く、経験できることを願っています。

この度は、どうもありがとうございました。

谷村 格 TANIMURA, Itaru

87 年社会科学科卒 (31 期 ID87)

分水嶺

雨の日、窓ガラスの水滴。水滴同士が複雑な動きをしながらガラスの表面を落ちていく。水滴がたどり着く場所は様々だ。

人生もそんなもので、日々の些細な事が組み合わさりたまたま今日があると感じる。「ある日偶然その友人に会った」「出発時刻間際の空港の書店で飛行機で読む本を急いで買った」「友人の送別会に行った」…それが無かったら、全く違った今日になっていると思う人生の分水嶺が数十ある。そのなかでも大きなものが幾つかある。

ICU

大学の進学先として ICU を選んだ。実は父親も ICU 卒業（1 期生）だが、その影響より、根が怠惰なので環境は少し厳しい所に身を置かないと無為に 4 年を過ごしそうだと思う。「ICU は良く勉強する環境がある」という事で選んだ。結果的に勉強はそこまでしなかったが、野崎昭弘先生のパラドクス、村上雅子先生のミクロ経済学、村上陽一郎先生の科学史など今でも記憶に深く残っている楽しい授業に刺激を受け、発想が豊かな友人と日々触れ、ラグビー部で泥にまみれた。それが自分の原型を方向付けたと感じている。ICU ではなくいわゆる「普通の大学」に進んでいたら... 全く違った今日があるだろう。

就職：マッキンゼー

3 年生の時、バカ山で寝転んで居たら、友人に「高給のバイトがある。一緒に受けに行こう！」と誘われ、初めて耳にしたマッキンゼー（今は多少知名度はあるが、当時は世間的な知名度はとても低かった）のサマーリサーチプログラムの面接を受けに行った。「あなたのセールスポイントは？」という質問に「体力には自信があります」と的外れな回答をした。「結果は 1-2 週間後にハガキでお知らせします」と言われたが翌日には「不合格」のハガキが届いた（箸にも棒にも引っかからなかったのだろう）。ただ、それをきっかけにマッキンゼーの事を知り、本選考時にはオファーを貰い就職した。あの日、友人にバカ山で声をかけられなければ... 全く違った今日があるだろう。

起業：エムスリー

35 才の時、会社を辞め起業した。怖い面も有ったがチャレンジしてみた。「インターネットを使い健康で楽しく長生きする人を 1 人でも増やし、不必要な医療コストを 1 円でも減らす」というビジョンを創立の日に定めたエムスリーという会社だ。数人で始めたが、巡り合わせもよく今はスタッフ約 8,000 人、15 カ国に事業展開をする企業になった。日々、

色々な国で様々な医療課題の解決に取り組んでいる。

あの時、起業せずに会社に残っていたら... 全く違った今日があるだろう。

3つの分水嶺の組み合わせは8通りあり（2の3乗）、今は8分の1の所にたまたまいる。
その組み合わせが変わっていたらどうなっていたかは分からないが、本人としてはこの組み合わせで良かったと深く感謝している。今度は自分も関わった人にとり良い分水嶺になれるよう、恩返しもしていければと思う。

児玉 治美 KODAMA, Harumi

92 年社会科学科卒（35 期 ID91）
94 年大学院行政学研究科修士課程修了

ICU に入学したのは、当時アメリカの高校に通っていて、「将来国際協力に関わる仕事がしたい」と感じていた私にとっては当然の選択でした。今でこそ帰国子女を積極的に受け入れる日本の大学は多いですが、当時は数えるほどしかなく、その中で ICU はすでに老舗のような存在でした。

帰国子女や外国人留学生も多く、自由な校風で、すぐに溶け込むことができました。一番感銘を受けたのは、一つ一つの授業の内容の濃さと先生方の素晴らしさでした。卒業論文の指導をしてくださった最上敏樹先生には、私の最初の就職先となった参議院議員堂本暁子さんを紹介していただきました。国連を退官してすぐに ICU の教授になられた功刀達朗先生には、在学中、模擬国連の仲間達と朝まで放映のテレビ番組に出演した際に、コメンテーターとして徹夜でお付き合いいただいた他、卒業後、先生が編者として出版された本の一章を書かせていただいたりもしました。その後、功刀先生が事務次長を務められた国連人口基金に勤務することになったのもご縁を感じます。功刀先生には毎年 ICU のアラムナイハウスで開かれる功刀ゼミの卒業生の集まりに呼んでいただいたり、今日までひとかたならぬお世話をいただいております。

これらの先生方の他、憲法、特に表現の自由の権威であった故奥平康弘先生、政治学がご専門で当時からメディアでも活躍されていた姜尚中先生、国際法を教えるのに井上ひさしの『吉里吉里人』を必須の読み物として課された故横田洋三先生など、ICU で印象に残った先生や授業は数限りなく、先生方の発する一言一言を噛み締めながら聞き、授業の後には素晴らしい内容であったと、先生にお礼を申し上げることもよくありました。

学部、大学院在学中は模擬国連に没頭しました。ICU をはじめ東京の主要な大学の学生が集まる模擬国連活動のおかげで、将来国際協力の分野で働きたい、国連に勤めてみたい、という思いが強まるとともに、同じような志を持つ友人達との一生の絆ができました。また、冷戦終結後の混沌とした世界に想いを馳せ、反アパルトヘイト運動をはじめとする様々な市民運動や集会などに参加したのも、正義感溢れる ICU の先生方や友人達に触発されてのことでした。

卒業後、参議院議員秘書、国際 NGO（ジョイセフ）、国連人口基金、アジア開発銀行と、何度か転職しましたが、一貫して変わらないのは尽きることのない国際協力への想い

です。その想いを育んでくれたのが、紛れもない我が母校、ICUです。18年間の海外勤務の後、一昨年日本に戻り、久しぶりに訪れた ICU でのイベントに登壇しましたが、在校生達の生き生きした表情や積極的に質問を投げかける態度に接し、嬉しくなりました。リベラル・アーツを教える ICU は、専門的知識だけでなく、幅広い教養と国際性、そして自分で物を考え、表現する力を養ってくれるところです。今後、また海外に赴任することになるとは思いますが、世界中どこに行っても各界で活躍する ICU の卒業生に巡り会えることでしょう。

ICU 生を含め、若い世代の女性、男性両方を応援していますが、特に日本の若い女性には活躍してほしいと思います。私は自分のキャリアの中で、ジェンダーの平等を一つのテーマとしてきましたが、一人の女性として、この分野での進展の遅さに憤りを感じます。私自身、問題提起するだけでなく解決策も含めて積極的に発信し続け、次世代にとっての良いロール・モデルとなれるよう精進していきたいと考えております。

この度は DAY 賞にお選びいただき、誠にありがとうございます。身に余る光栄ですが、皆様のご期待を裏切ることがないよう、今後も途上国での貧困の削減と持続可能な開発のために努力していきたいと思っております。

酒井 里奈 SAKAI, Lina

95 年国際関係学科卒（39 期 ID95）

DAY 賞をいただくことになり、とても誇らしく、同時にまだまだ道半ばにも関わらずこのような賞をいただき恐縮しています。

ICU を選んだことは、私がこれまでにしてきた数々の選択の中で、最もインパクトがあるものだったと感じています。

保守的な女子校で学んでいた私が、ICU を選んだのは、広いキャンパス、自由な雰囲気になったからでした。世界人権宣言へ署名をして入ったキャンパスには、明確なビジョンを持った友人、先輩や後輩が大勢いました。一方、私はその割に勉強やサークルに打ち込むわけでもなく、ただバカ山のんびりしていることが多く、人生の目的に向き合い学ぶ友人たちを眩しく感じていました。とはいえ、ICU で、人生や学びの楽しさを教えてくださる先生方、友人などと共に過ごす中で、フェアであること、個性に向き合うこと、学びの楽しさを知り、今でも ICU で培った価値観が私のベースになっていると感じます。ICU の空気が大好きで、何をするでもなく、夕方、夜まで図書館のキャレルで本を読み、友人と自転車に乗って駅まで帰った日々を懐かしく思い出します。

私は今、ファーマンステーションという会社を経営しています。ICU 卒業後に、金融機関などで 10 年間勤務（ここでも ICU の先輩、友人、後輩にお世話になり、今でもお付き合いしている大好きな方々が大勢います）し、発酵技術に興味を持ち、突然思い立って東京農大に入り直し、その縁をもとに起業しました。ここまで来るには紆余曲折があったのですが、思い返すと、ICU 在学時に出会った友人たちのように、私も自分が心から打ち込めることを探したい、と思い続けた結果、今に至っていると感じます。金融機関を退職して、農大に入る、といったとき、あまりに突飛な発想に「??」という反応がほとんどだったのですが、ICU の友人は「面白いね！いいね！頑張って！」と必ず言ってくれました。

ファーマンステーションは、独自の発酵技術で世の中にあふれる未利用資源を再生し、循環型社会を構築することを目指すスタートアップです。東京と岩手に製造拠点をもち、休耕田で栽培したお米や食品残さなどを原料にアルコールを製造、高付加価値製品にして販売する事業をしています。地域と都市の両方の視点を持ちながら、グローバル展開を目指しているのですが、この視点はまさに ICU で培ったものだと感じます。ベンチャー企業として事業の拡大を実現しつつ、社会課題の解決も同時に目指すという事業形態は、日々葛藤も多く、チャレンジの毎日ですが、同時に楽しくもあります。

正直、目指している世界の実現には程遠く、DAY 賞をいただくには何も実現できていないと感じているのですが、この賞に恥かしくないよう、尊敬する大好きな ICU の仲間みなさまに対しての、私の意思表示といううことで、これからも頑張りたいと思います。

この度は DAY 賞にお選びいただき、誠にありがとうございます。

在学中、学業に力を入れていたとは必ずしも言えない私にとって、ICU 同窓会から素晴らしい賞をいただくことが、恐縮でもあり、また、面映ゆくもあります。

当時は、好奇心の赴くまま、さまざまなことに「とりあえずチャレンジする」学生でした。バックパックスの旅、様々なアルバイト、ワークキャンプ、ボランティア、インターン etc.。これらの活動によって大学に行かない時期があっただけでなく、これらは恥ずかしいほど長続きはせず、さまざまなものをかじって味見をしては目移りする日々だったように思います。恩師である石生義人先生には、しばしば多大なご心配をおかけしたことを、今でもよく覚えております。

いま、私は、ブラインドサッカーという障がい者スポーツに携わっています。実はこれも、そんな好奇心の旅のなかで出会いました。飛び込んでみたインターンシップ先で情報を知り、なんだかよくわからないまま見に行った程度のきっかけでした。それがいまや、社会人歴で、もっとも長い仕事となっています。

ブラインドサッカーと聞くと「視覚障がい者のスポーツですね」「パラリンピックの種目ですね」と、近年その存在は知られるようになってきました。パン屋さんがパンを扱うように、私の仕事はブラインドサッカーというスポーツを扱います。スポーツを普及したり、試合機会を提供したりと、「スポーツの仕事」と言えるでしょう。

他方で、このブラインドサッカーという小さく浅かった井戸を掘ってきた私は、そこで、障害とは？ 視覚とは？ 経営とは？ 非営利組織とは？ と考えさせられる機会が多々ありました。それは、表面上の「スポーツの仕事」だけでは、うまくいかないことが多かったからです。

そこを更に掘り進めていくと、公正とは？ 平和とは？ と、さらに抽象的で、普遍性ある問いに至ります。「小さくて浅い井戸でも、深く掘り進めれば普遍的な水脈にたどり着く」のだ、と今、感じています。

この水脈に至る思考や視点こそが、私が学業と学外活動のなか、ICU で学んだことではないかと思うのです。教室だけでなく、学食、そしてバカ山で、青臭くまっすぐに友人と対話し、思考を深くしようとする経験ができた ICU の学風にこそ、私は知らぬ間に鍛えられていたのです。

いま、ブラインドサッカーが「スポーツの仕事」を超えて、公正や平和と向き合う取り組みである実感が私にはあります。それこそが、ICU に通った成果であり、本賞受賞の評価と信じるところです。

末筆に、「顕彰は時代の空気がつくる」とも感じます。このような賞を、人生半ばにも至らぬ私が受賞できた理由は、実績より期待であることでしょう。オリンピック・パラリンピック「ブーム」の渦中にある業界ですが、これを一時的なことから捉えることなく、深く掘った井戸の水脈の普遍性に向き合うことで、ご期待に応えるべく、これからも感謝を持って努めて参ります。